

# 特別賞 三省堂書店賞

『あしたから出版社』 島田潤一郎著

文学部 文学科 1年 加藤木一紘

夏葉社という出版社を知っているだろうか。たった一人で運営され、ひっそりと活躍している小さな出版社だ。本書は、それまで定職についていたことがなかった著者が、仲の良かった従兄の死をきっかけに一人で出版社を立ち上げ、大切だと思う本をつくるために奮闘するという自伝だ。「あしたから出版社」という題名は、ひとり立ちをするという著者の決意が現れている。

しかし、ただでさえ不景気の今日、一人で出版社を運営するのは楽なことではない。まともな技術も人脈もないままなんとか本を作ってみても、実績のない出版社だからと、本屋に本を置いてもらえない。売れない本の山を見て、頭を抱える日々。

しかしそれでも、著者は諦めない。なぜだろう。そんなものなどやめて、どこかの会社に入ったほうが何倍も楽なはずだ。

私たちはお金を払って、対価としてそれに見合っただけのものを受け取る。人と人とのやり取りがあり、そこに人間関係が生まれる。お金は、サービスに対するお礼の量だ。少なくとも今まではそうだった。しかし、現在では市場の規模が大きくなりすぎて、一人一人の顔が見えなくなっている。パソコンを眺めるだけの毎日に、何のために働いているのかが分からなくなる。売り上げを伸ばすための数字の羅列に、人の笑顔は映らない。

そんな社会の中で、ある意味で流れに逆らいながら、著者は寡黙な職人のように、自分の良いと思った本だけを作り続けている。有名ではない詩人の詩集、昔に一度出たきりの海外文学の翻訳書、町の本屋を集めた『本屋図鑑』。装丁や表紙にこだわりぬいた本からは、儲かるか儲からないかを越えた、本に対する強烈な愛がうかがえる。

「たとえ全然売れなくても、自分にとって、意味ある本だけを出版すべきなのだ」

自分の想いを本という形に託して人に伝える。その行為に、働くということの核があるような気がする。

利益を追求するのが悪いことだとは思わない。生きていく上で、それは間違いなく必要なことだからだ。しかし、そればかりを考えるうちに、人と人との間に生まれる温かみのようなものを感じる余裕が、失われてはいないだろうか。私たちがどこか忘れがちになっている大切なものを、著者は確かに持って、今日も本を作っているだろう。